ルワンダ難民救え！

日本のNGO、お先に人的支援

コレラなどによる死者が続出するなどルワンダ難民の窮状が深刻化していることから日本国内の非政府組織（NGO）の間に、医療活動や水の確保を支援するために必要な要員を派遣したり、募金活動を始めるなどの動きが広がっている。

同国では新政権が発足した後も難民の惨状は変わっておらず、一刻でも早く、死に直面する人々を救わなければ」と、政府より一足早く「人的支援」に乗り出した。

医師派遣、井戸掘り募金も

アジア各地の医療関係者と連携しているアジア医師連絡協議会「AMDA」（岡山市、菅波茂代表）と岡山カトリック教会が結成した「ルワンダ難民救援グループ」は、ルワンダの国境近くのザイール北東部の都市ゴマに医師を三十日から派遣する。ゴマには百二十万人のルワンダ難民が流れ込んだが、コレラがまん延、死者が急増しているため、コレラ処置センターをつくり治療を行う。

八月十日には第二陣の派遣も予定、すでに三人の医師、看護婦の参加が内定しているが、さらに医療関係者の志願者を募っている。医薬品購入、輸送に必要な募金も呼び掛けている。

AMDAはすでにルワンダ国内の避難民を対象に、同国北東部で医薬品の調達をするなどの救援活動を行っている。現地に行った医師の吉田修さんは「医師以外に、物資の調達などにあたる調整員になってくれる人がいれば」と話している。

一方、難民を助ける会（東京都品川区、相馬雪香会長）はルワンダとの国境に程近いタンザニア北西部、ベナコに逃れた難民とルワンダ国内の避難民が使う井戸を掘るため二千万円を目標に募金活動をし、ポンプなど井戸掘りに必要な資材を購入。スタッフを派遣して現地の作業員を指導しながら、生活用水用の井戸を三十本掘る予定だ。

ベナコはもともと非居住地域で、井戸などの施設はまだなく、近くの小川に水を頼っているのが現状。同会では「十五メートルぐらい掘れば、きれいな水が出るので、キャンプでの生活が向上する」と、救援活動の効果を説明している。

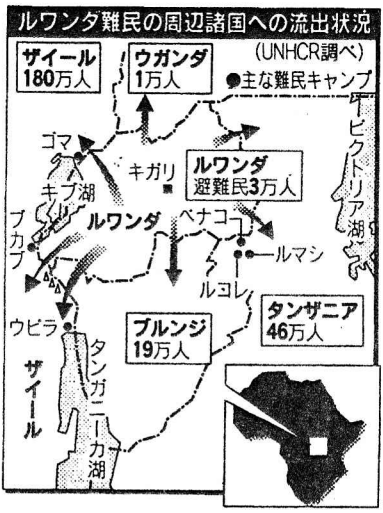
ベナコにはアフリカ教育基金の会（北九州市、土井高徳事務局長）も看護婦、栄養士、教員の三人を五月初旬から派遣して病院を設置、現地スタッフと共同で医療活動にあたっている。七月までに近くのルマシに病院を、ルコレには学校をつくり、この三人が巡回して支援活動を行っている。三十日には新たに看護婦など三人を「増援部隊」として派遣。「八月からはルワンダ国内の避難民にも医療援助を実施したい」と、活動範囲を広げることにも意欲的だ。

ルワンダ支援ではこのほか、月刊誌の発行などアフリカ諸国のPR活動などを行っている社団法人アフリカ協会（福永英二理事長）が募金活動を開始。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、日本赤十字社といった機関も一般の救援募金を呼び掛けている。ルワンダ難民救援グループの原田豊己代表は「コレラがこれ以上まん延してからでは遅い。政府の人的支援の決定より早く行けるので、我々が出ることにした。どこにでも出やすいNGOの長所を生かしたい」と話している。

2つのNGOに無償資金協力

外務省発表

外務省は二十八日、コレラや飢餓に苦しむルワンダ難民に対する援助策の一環として、現地で医療支援活動に取り組んでいる二つの非政府組織（NGO）にそれぞれ一千万円弱ずつの無償資金協力を実施すると発表した。対象となるのは「国境なき薬剤師団」と「国境なき医師団」で、いずれもフランスを本拠地にする国際的なNGOとして知られる。

ルワンダ難民の周辺諸国への流出状況

（UNHCR調べ）